



名古屋市には、課外支援サービスを提供する施設が 300 あります。これらは、日本の児童福祉法に基づき、身体や精神的な障がいをもつ 6 歳から 18 歳までのこどもたちを対象としたものです。施設の管理者は、一人一人の子どもの特性に基づいた発達支援プログラムを作成し、子どもたちは生活能力の向上のための訓練を受けながら、そこで充実した課外時間を過ごします。「日本福祉協議機構」は、名古屋市子ども福祉課の管理及び政府の助成を受けて、特別児童に課外支援サービスを提供するための施設の 1 つです。

創立者の濱野剣代表は、特別な発達の特性を持つ子どもでした。ご自身の経験から、このような子どもが小さい頃、適切な支援を受けたことによって、将来の人生が大きく変わる可能性があると感じることで、10 年前、特別な子どもたちに生活能力の向上を支援する施設を設立し、その後、名古屋市と豊田市で、発達障害のレベルに応じた異なる支援教室 9 つまで開設しました。

ここへ来るのは、医療機関で発達障害と認定された子どもたちです。その中には、通常の IQ といくつかの面で優れた能力を持つ学生が少なくありません。授業中声を出したり、通常のクラスの枠組みに適応することができないので、彼らの多くは小学校入学の時期から特別支援学級に配置され、個別な指導を受けながら、学校生活を送っています。

自制心やコミュニケーション能力が欠如する彼らは普通のこどもたちの輪に溶けこむことが得意ではなく、活動範囲や触れる世界が比較的狭いです。たとえ特別支援学級がこれらの子どもたちを助けるための手段であっても、「障がいを持つ」コンプレックスが長くなると、彼らは自信がなくなり、能力が潰されます。他の生徒のような活動に参加できないという現実も、劣等感や孤独感に悪影響を及ぼします。

日本福祉協議機構の放課後等デイサービスは、まさに学校で得られないものを補うことを目的とし、子ども達の身体的および精神的発達において、一人一人にあった個別な支援を提供するもので、活動は主に楽しい遊び中で行われます。易しいライフスキルトレーニングゲームや科学実験、そしてシンプルな手芸作りやサイエンス料理などがあります。英会話、武道の教室、ダンス、音楽、読書、さまざまなボディエクササイズで、どの子どもも自分の好きな活動に参加することができます。

屋内でのアクティビティに加えて、季節ごとの屋外ハイキング、自然へのアクセス、または公共の体験施設への見学体験があります。子どもたちは豊かな活動を通して「好き」を見つけ、その繰り返しの経験を通して物事に対する理解が深まります。それは、言語療法、運動療法、音楽療法、集団療法などを通して、精神的および社会的行動の安定性を達成し、脳と感覚の感受性の改善を促進するためです。集中力および認知スキルを向上させることによって、コミュニケーションスキルを向上させます。さらに、生活への感受性を豊かにもたらすことによって、彼らの将来に適応する能力を高めます。

高機能自閉症スペクトラムの子どもを対象にする「子ども向けコンピュータプログラミング教室」は、同業界で話題になっています。トレーニングを通してこどもたちが自己理解



を深め、自分のできることを見つけることをサポートする取り組みの一つですが、子どもが生計を立てるために学ぶことについて前向きではない親もいます。将来わが子が福祉支援制度に頼って暮らせることに満足する親たちに、濱野さんは次のように訴えています。

優秀な子どもたちは将来 IT や AI の社会でプログラマーとして、障がい者補助金より多くの収入を得ながら、尊厳のある生き方で生きてほしい。子どもたちに対するサポートは結果がすぐに見えないもので、学校の勉強成果を求める親は少なくありません。子どもたちの特別な能力を伸ばし、自信をもって自立できるような大人になっていく訓練を持続させることにはたくさんの課題があります。

発達障害を持つ当事者として、濱野さんは、これらの子どもたちの将来に対して大きな使命感を持っているようです。「私たちが改革していく。福祉の理念や障がいを持つ子どもに対する見方を変えたい。彼らの生きやすい道を作ってあげたい」と濱野さんは強調しました。

実際、人が生まれてきたとき誰もがアスペルガーであり、他の人に適応されないという特性を持っています。成長の段階で各々の特性徐々に削られていきます。いわゆる発達障害は成長の過程で社会の平均よりその子が特性のようなものが強く残っているもので、それらが「障がい」または治療および矯正が必要な病気とされていることは「発達障害」者が生きづらさを感じる原因になります。

「自閉症スペクトラムは病気ではなく、血液型が異なると同じ、色々なタイプの人っていて、すべての人を受け入れる社会に変わってほしい。社会がより寛容的になったのみ、発達障害を持つ人間は生きる難しさを感じず、そして並外れた才能を持つ子どもたちは社会に特別な貢献をすることができます。」「いつか、アスペルガーを持つ人が堂々としてそれを自己紹介できるとき、彼らはもはや周囲に無理に合わせるストレスを感じることはなく、人々が自分の特性を理解し、さらには祝福さえしてもらえるとき、それは理想な社会だ」と濱野さんはこのように語りました。

日本福祉協議機構のスタッフに発達障がいと自覚している人もいます。彼らは理解と愛情をもって特別な子どもたちを寄り添います。

あるスタッフは自分の仕事を次のように話しています。



「彼らは社会の大人達が決めた枠の中で、一般の子ども達より選択肢が少ない時間と現実を過ごしています。だから、たくさんの種を蒔いて、たくさんの事を経験してもらって、知ることから始まる学びを経験してもらって、選択できる自由な未来に導いてあげたいと思っています。私たちがサービスを提供するとき、子どもたちを障害者とせず、好奇心が豊かな子どもたちとして接しています。子どもたちと毎日過ごした時間の中で最大限に彼らの新しいことを発見し、その能力を伸ばしていくことを模索しています。」